

生活科の教育目標論の試み

—生活科教育実践アンケート調査の結果から—

谷 哲弥

(向日市立第6向陽小学校 京都教育大学大学院院生)

Attempt of Educational Goal Theory of Living Environment Studies
-From The Result of Questionnaire Survey on Living Environment Studies-

Tetsuya TANI

2016年11月30日受理

抄録：新設後、30年になろうとする生活科の現状を把握するために、現場の教員に対して「生活科教育実践アンケート」を実施した。このアンケートを分析することで、生活科の実践の現状と課題把握を試みた。本稿では、生活科実践をめぐる教員の意識、実践の方向性、評価の3点で分析を行い、これを起点として、より積極的に生活科の教科としての在り方や教育目標を再考する機会づくりへと展開することを目指した。

キーワード：生活科 生活科教育実践アンケート 教育課程 評価

I. はじめに

生活科の発足（1988年）からもうすぐ30年になる。この間、生活科学習指導要領¹⁾は2度の改訂を経た。この生活科は、小学校現場にどのような実践をもたらしたのかという問題意識で、生活科実践を担う現場の教員（低学年担当）へのアンケート集約を行い、その現状と課題の把握を試みた。

II. 生活科研究と実践

1. 京都府生活科研究推進校・開発学校、京都府長岡京市長法寺小学校の生活科

1988年から1990年まで、「生活科研究推進校・開発学校」の一つである「京都府長岡京市立長法寺小学校」で検討された教育課程²⁾の特徴は、同校のそれまでの理科教育研究の成果を踏まえ、低学年理科や社会科の良さを生かしたもの¹⁾であった。主な単元は次の通りである。

- ・2年間を見通した小麦の栽培からパン作り³⁾－1年10月から2年6月まで
- ・地域の竹林探検－1年6月から10月ごろまで
- ・竹林や農家の仕事探検－1年6月から2年5月まで、仕事の区切り毎に実施
- ・竹を身近な素材として物づくり－1年9月から11月頃まで

このような特徴を持つ教育課程が、京都府内の小学校の生活科のモデルとして、府内に広まっていくことになる。筆者は、研究推進部として1年生を担当し、他校からの視察に、折々の具体的な授業を公開したり、日常の児童の様子や生活科ルームと名称をつけた学年共通のオープンスペースの様子を説明したりという役割を担ってきた。

2. 地域の竹を教材化すること

地域の竹を教材としてすすめた授業実践を「子どもに身近な生活科小学校1・2年ものづくり」⁴⁾としてまとめた。この「ものづくり」によって次のようなことをねらった。

- ・ものづくりに取り組むことで、つくりたい物を描いて、必要な物を用意できるようになる。
- ・ものづくりに必要な道具を使うことができるようになる。
- ・紙を素材にした工作から始めて、干し柿作りを経験し、竹材を生かしたものづくりへと見通しを持った。

地域の竹を教材化する際に大切にすることは、次の点である。

- ・毎日の通学路で目にしている「竹」に着目したことで住んでいる地域への視線を養えること
- ・児童は、自分の生活から竹を見つけ出し、学級で他の児童と交流する中で、疑問を出し合うこと。
- ・それらの疑問を持ち、竹を栽培する農家に聞き取りをして、新しい事実に気づくこと。
- ・竹の特性を生かしたもののづくりの動機付けへと展開すること
- ・竹を加工するための道具を使えるようになること

このような一連の学習活動では、新しい発見を次の学習活動の動機付けとして活かすことが出来る。すなわち、学習活動の結果、児童の気付きや発見が児童の対象（竹）への視野を広げるとともに、進んで取り組んでみたい活動を具体的にイメージすることができるようになる。児童の発展的な思考や活動動機を促したのは、教材配列の順次性が適切であったことが考えられる。つまり、身近なものから展開して、また身近なものにもどるという流れに特徴があったと考えている。

全国一律の教科書が作られることは、日本中の小学校でほぼ同一の内容の生活科が実施されることとなりうる。そうなれば、教育的効果が大きいといえる地域の教材が生かされなくなることになってしまう。つまり、身近な地域教材や、その地域の自然に住む人々の生活を支える産業や昔から受け継がれてきた生業を教材化することができなくなるのではとの心配が生まれる。加えて、地域にある素材を生かしてより深い教材研究⁵⁾を行うという教員としての姿勢までも後退してしまうのではないかと考えてしまう。

3. 校区探検（公園さがし）についての実践考察

校区の公園を探検する活動では、教師が校区の公園を、どこにでもある「公園」としてしかとらえなければ、校区にある公園での児童の生活や地域の住民の生きている日常などを想像しづらいものになってしまう。そこで、やはり、校区の公園ならではの学習を見通す教材研究が必要である。

「この公園は〇〇君と遊んだことのある公園です。」「この前、公園を通ったら、知り合いのおじいちゃんが、ベンチに座って、本を読んでいた。」「〇〇君のおばあちゃんが友達とゲートボールの練習をしていたよ。」「消防署の人が来て、何か点検をしていた」など校区にある公園だからこそ、身近で生活に密着した話題につながり、公園に集まる住人とのコミュニケーションに発展するものである。そこから、次の活動への動機が生まれる。

校区にある公園探検を行った後の授業で次のような発問を投げかけることが考えられる。

「公園に来る人にはどんな人がいるだろうか？」

「公園に必要なものはどんなものだろうか？」

「自分が公園を作るとしたら、どんな公園を作るだろうか？」

1年生にとっては少し難しい問いかけではあったが、「公園に来る人」を出し合い、「公園にある方がいいもの」を話し合い、「子どもにとっての公園」を自分なりに話したり、描いたりすることができた。

その上で、公園のもうひとつの機能として、公園巡りの時に写した写真を示して、防火水槽が地面下に設置されていることを1年生に話す。公園には、雨水をためてあり、もし火事が起きたら、その水を使って消火活動が

行われることを紹介すると、「雨水がいっぱいになったらどうなるのですか？」という質問が飛び出した。子どもらしい感性に感激をした。

このような学習がたちまち中学年から始まる社会科の学習につながるとは言いえないが、低学年の時に「公園の地面には水がためてある」ことを知ったことにより、普段は気付かないが、町を守る仕組みがあるのではないかと想像できる児童になっていくものと期待される。

Ⅲ. 生活科教育実践アンケート

低学年の教育に関して、幼稚園教育とのつながり⁶⁾というテーマ、小一プロブレム⁷⁾といわれる課題があり、その状況のもとで、筆者は、近年、生活科の実践があまり語られなくなってきたという印象を持っている。そのため、生活科の授業を担当する教員の実際の思いを具体的に知り、これからの実践研究に生かすために自分の周りの教員や生活科の研究会に参加する教員などにアンケートを実施し、「生の声」を集約分析することとした。2015年3月末より依頼・集計をはじめて、2015年8月現在で、60名の教員の協力を得て、集約し、結果をまとめた。以下には、集計結果を図1から図10とコメントの形でまとめた。

1. 生活科教育実践アンケートの設問と集計結果（設問2～5までの集計グラフの縦軸が人数である。）

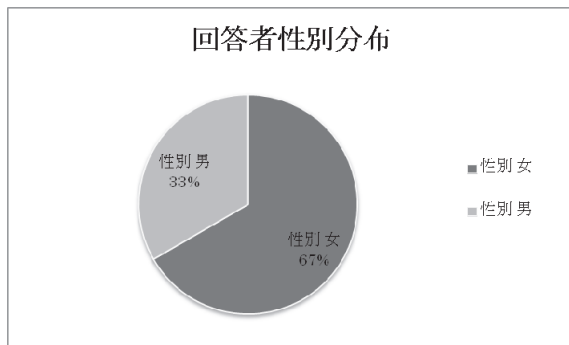


図1－設問1 回答者性別分布

設問1 回答者の性別は、7割近くの教員が女性であることがわかる。（女性67%、男性33%）

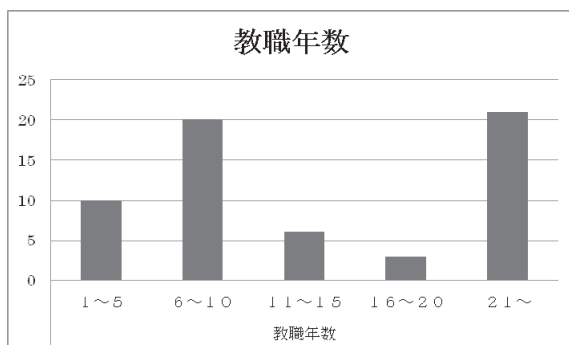


図2－設問2 回答者の教職年数分布

設問2 回答者の教職年数の分布は、21年以上と6年から10年の層が多いことがわかる。この二つの教職経験年数の教員が多くを占めている。

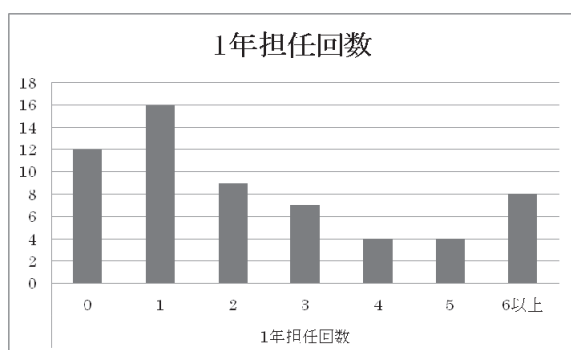


図3－設問3 1年生担当回数

設問3 低学年の担任経験では、1年生担任の経験者の人数は、1回が多くを占め、回数が増えると人数が減る傾向がある。しかし、6回以上の経験を持つ教員もいることがわかる。

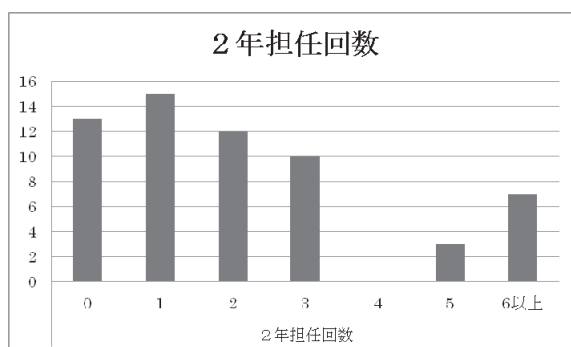


図4－設問3 2年生担当回数

2年生担任経験は、1年生担任経験者の人数分布と似た傾向がある。人数としては、2年生担任の方が多くなっている。6回以上の経験を持つ教員もいることがわかる。

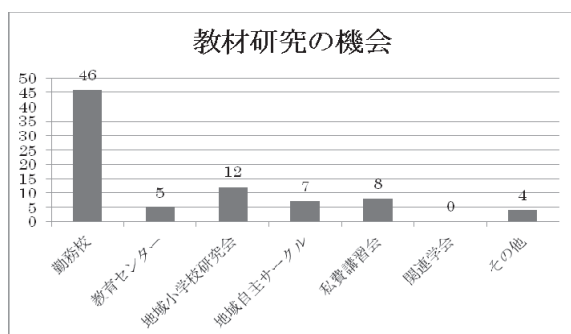


図5－設問4 教材研究の機会

設問4 生活科教材研究の機会（複数回答可）は、圧倒的に勤務する学校となっている。各地域小学校研究会が次いでいる。

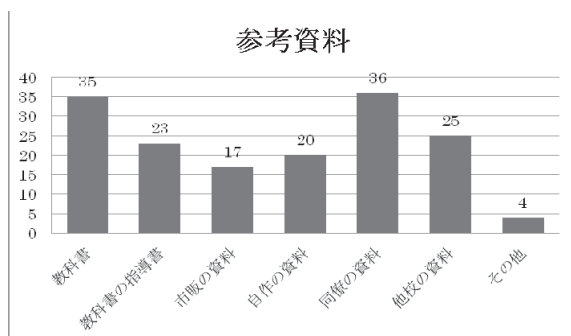


図6－設問5 参考にする資料

設問5 生活科の授業で参考にしたものは、多くは教科書と同僚の作成した資料である。生活科の教科書が体験の手本として位置付いていることがわかる。また同僚の資料は実践的継続性があり、その学校の特性を生かしたり、これまでの低学年担当の創意工夫が生かされていたりするものである。

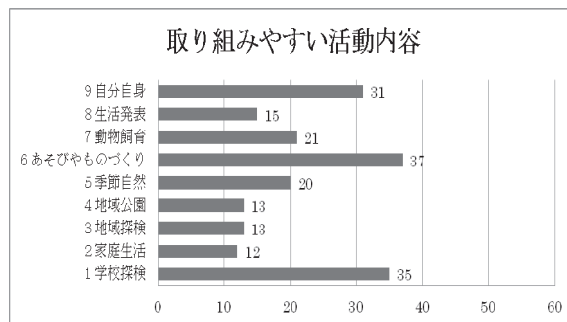


図 7－設問 6 取り組みやすい活動内容

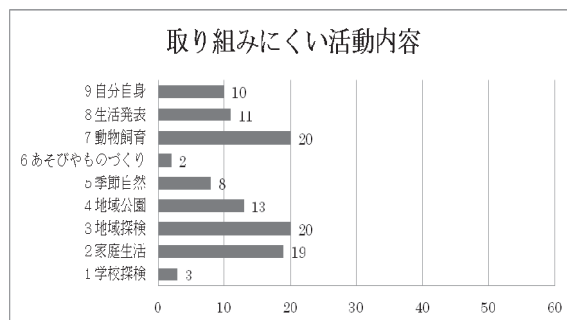


図 8－設問 7 取り組みにくい活動内容

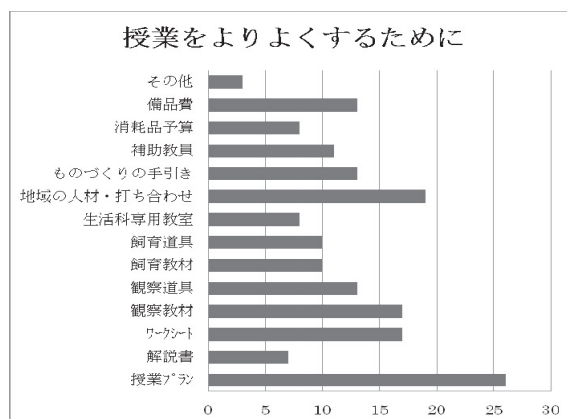


図 9－設問 8 生活科の授業をよりよくするために必要なもの

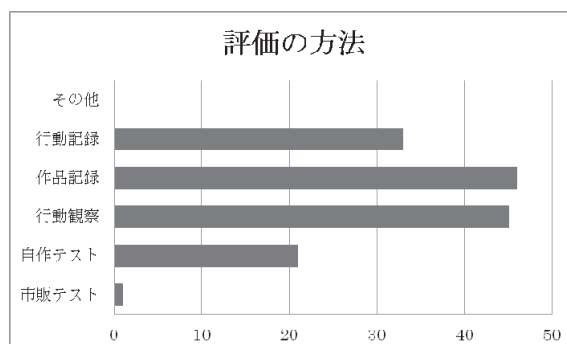


図 10－設問 9 生活科の評価方法

設問 6 取り組みやすい学習内容としては、学校探検・自然の者を使った遊びやものづくり・自分自身の成長などを記していく活動があげられている。

設問 7 取り組みにくい学習内容としては、動物の飼育・地域探検・家庭生活を題材にした内容である。

設問 8 生活科の授業をよりよくするために必要と思われることは、授業プラン・地域の人材発掘や体験のための打ち合わせ・ワークシートや観察教材が上げられている。教科書を参考にした授業の進め方にヒントとなるようなプランやワークシート例が求められている。

設問 9 生活科の評価の方法は児童の作品を残しておいて、評価する。または、学習中の様子・行動を観察することで、児童の気づきを拾ったり、単元の学習の様子を観察したり記録したりして、評価につなげていることがわかる。

設問10 生活科全体に対する印象については、教職年数によるコメント分析を試みる。コメントを以下のように分類した。また、コメントは回答原文のまま掲載する。

A	積極的な取り組みが期待できる
B	迷いながらも取り組む姿勢が見取れる
C	困難な面が強調されたコメント

表1-1 生活科全体に対する印象（教職年数 1～5年）

A	生きていく力を付けていく授業 子ども達が楽しんでいる 地域の実情にあわせていろいろな活動ができる いろいろな体験ができる 関心を持って活動に参加できる
B	植物を育て、観察する。それ以外はどうか教えたらいいか難しい
C	漠然としている教科の目的が分からない 教え方が難しい

表1-2 生活科全体に対する印象（教職年数 6～10年）

A	教師が楽しんでやれば楽しい授業になる 低学年からものをじっくりと見る力・考える力をつけさせたい 子どもの気付きから学びを作る 授業だけでなく、休み時間を含めた生活を通して行うもの 日常生活から切り離せない
B	社会科や理科につながるイメージがない独自のもの それぞれの学校で取り組むことにバラバラを感じる 勤務校によって学校の色が違う 評価が難しい。学びが見えにくい 教科書だけで進めるのは難しい 何を大切にするのか どんな発達段階なのか
C	付けさせる力がぼんやりしている 内容が少なく、時間を持てあましてあさりした授業で終わってしまう 教科書や指導書を見ても取り組み方が分からない

表1-3 生活科全体に対する印象（教職年数 11～15年）

A	地域密着連携型 とても自由である 柔軟な学習 生活に沿った学習
B	教科書があつて無いようなもの 子どもの実態にあわせるので苦勞する
C	目当てがぼんやりしていてどのような力を付けるのかははっきりしない

A	校区の実情が分かっていると進めやすい 自由度が大きい
B	教師個人にかかる部分が多い
C	アサガオを育て、学校探検をしておわり、国語や算数の時間に変わっている場合がある

表1-5 生活科全体に対する印象（教職年数 21年以上）

A	具体的で科学的な生活科を目指したい 自然認識・社会認識の基礎を培いたい 身の回りのものを通して、自分の生活を支えているものに気付く 自然や社会に対する認識の芽 単に遊びになってしまうような生活科はやめたい 自然観察と理科工作・町探検が主です。
B	系統性が欠けているように感じる 気付きをさせるためのしかけをどのようにするのか大変である
C	ねらいがあいまいな体験だけの学習 なかなか指導内容が決まらない 評価の仕方が難しい 理科や社会科に結びつける見通しを持ったカリキュラムが持てない

設問11 3年からの社会科・理科につながるためにどのようなことを大切にしたいかという問いに対する回答の
まにに記載した。

- ・低学年の担任経験が無く、生活科の学習に触れていない教員からの回答としては、「たくさんの体験、科学的な説明のようなもの」「好き、楽しいと子どもたちが感じること」が挙げられる。これらから、楽しい学習・楽しい体験の量を求める意見が上がっていることがわかる。
- ・低学年の担任経験があり、生活科の学習に取り組んだことのある教員からの回答としては、次のものが挙げられた。活動の内容としては、「興味をもって自然に近づく実体験」「科学的な遊び」である。積み重ねておきたい経験としては、「気付きを交流し、より深い気付きへ導くこと」言い換えると、「気づいたこと・気になったこと・知っていること・知りたいことをたくさんしゃべること・聞いてもらうことを繰り返し経験しておくことを大事にしたい」というものである。

2. 生活科アンケートから読み取れるもの

1) アンケート集計結果の傾向

- *教材研究の機会は、圧倒的に勤務校である。
- *参考資料は教科書・指導書・同僚の資料がほとんどである。
- *取組が容易である活動は、学校探検・あそびものづくり・自分自身を振り返るものである。
- *取組が困難である活動は、家庭生活・地域探検・動物飼育である。
- *よりよい授業を進めるために、授業プランが求められている。そして、地域の人材、教材やワークシートの順に続く。
- *評価の方法は、児童に対する記録・作品に対する記録が中心である。
- *生活科の印象には、自由度が高く楽しい授業ができるという反面、教師による実践内容の差や評価の難しさ、

教科としての教材の系統性への疑問が出された。

＊中学年以降の社会科・理科につなぐために大切なこととして、楽しい体験を沢山積み重ねることを重視する意見と、自然とふれあう機会を多くしながら、その中で児童の持つ、気付いたことを話したい・聞いてほしいという気持ち（欲求）を大切に学習体験を持たせるという意見が指摘された。

2) 分析

第1に、現在の生活科実践は、勤務校での実践プランや準備物がほぼそのまま引き継がれて進められていることが分かる。勤務校に一定の実践的蓄積があれば、安定的に教員を支えることができると考えられる。

しかしながら、生活科の実践に対して「迷いながらも取り組む姿勢を見せている」教員は、その迷いを解決・解消する新しい手法を手に入れることが出来ていないのではないと思われる。先に示したように、よりよい生活科実践のために、「授業プラン・ワークシート・教材」を求める要望はそのことを一定反映していると考えていい。

近年、小学校の教員は、必ずしも次年度に持ち上がるか、再度同じ学年を担当できるという保障がない。よって、「迷いながら」も1年が過ぎて、低学年以外の学年を担当することになれば、その迷いを動機によりよい生活科実践を目指す機会を、次に低学年を担当する時まで、留保しなければならない。そうすると、継続的に自ら研修・研究を積み重ねることがより難しくなる。このような状況から、生活科の実践に新たな積み重ねを行うことの困難さが見えてくる。

第2に、生活科に対する教員の意識から、生活科実践の方向性を探ることができる。自由度が高いという指摘とは逆に、教科書を見ても何を学習するのか、わかりにくいという指摘である。このことは、実践例示としての教科書や、大枠としてのカリキュラムは手元におきながら、児童に体験させたいこと⁸⁾を明確にしたり、校区の実情から教材を探ったりすることで、実践の方向を広げることが可能であることが示されていると考えられる。実際、前述の通り、長法寺小学校では、竹をテーマにしたカリキュラムがあり、学年会によって、体験や教材の順次性を決定し、学習活動を組み立てることができた。

このことを勤務校で探る一つの方法として、教職員集団で、自然体験における原体験を語り合い、地域の自然をよく見て、教材発掘・教材発見を進めることを強調したいと考えている。児童と共に校区を歩く時に、教員も四季の自然、人々の働く様子、商店・交通の様子をとらえて、教室では、今日発見したこと・また行ってみたい場所を出し合って、次の校区探検の計画をたててみるという方法を用いて実践を積み重ねてみたいと考えている。

第3に、評価についてである。アンケート集計の通り、回答者の約半数以上が、児童の行動観察および作品記録などを中心に評価活動を進めていることがわかる。より具体的な評価活動はアンケートから見えにくい、職員集団で、評価したい「行動」・「作品」について、事前に、ポイントを検討しておき、どのような作品を持って、評価活動を行うのか、到達目標を文章化しておくというのではないかと⁹⁾と考えている。また、小単元を終えた後の短期的な評価と、単元を終えた後の長期的な評価を組み合わせて行いたいと考えている。後者では、観察カードや作品類をポートフォリオ形式によって評価することが考えられる。児童の作品を保管し、大単元毎に振り返ることを試みてはと考えている。この二つの評価を行うことで、児童の変容をとらえることができるのではないだろうか。

Ⅳ. まとめ

生活科教育実践アンケートを実施して、今後の課題として、つぎのような点についてまとめておきたい。

① 低学年の児童にとっての教育の在り方と生活科の実践研究について

生活科にかかわる研究の中で、生活科は教科であるのか¹⁰⁾という問いがある。生活科が行われる低学年児童

にとってどのような教育の在り方がよいのか検討を加えながら、生活科の目標について考察を進めることが重要である。

② 教科としての生活科の中で中心となる教育課題について

前項の内容を踏まえて、低学年児童の発達上の課題や現在置かれている状況を考えた時に、どのような体験によってどのような学力を育てていくのか、実践的な検討を加えることが重要である。

③ 生活科の教育課程検討について

生活科の研究指定校や教科書の教育課程を比較検討することにより、地域の社会的な特性を生かした体験学習、地域の自然環境に働きかける体験学習¹¹⁾、教科書の単元配列に検討を加えてすすめる学校らしさを生かした体験学習を導きだし、より発展的な実践の方向性を探れないかと考察をすすめることが必要である。

引用文献

- 1)、6)、7) 原田信之・須本良夫・友田靖雄 2012 気づきの質を高める生活科指導法 東洋館出版社
- 2) 長岡京市長法寺小学校 2008 研究紀要生活科の研究(第3年次)
- 3) 中野光・川口幸宏・行田稔彦 1993 講座 教科教育 生活科教育 学文社 pp.53
- 4) 谷哲弥 1994 子どもに身近な生活科小学生1・2年ものづくり フォーラム・A
- 5) 三石初雄 1992 豊かな原体験づくりと自然認識指導の重層性 白井嘉一・三石初雄(編) 生活科を創りかえる 国土社 pp.196-199
- 8) 平田庄三郎 1996 生活科の教材作り 理科教室'494,
- 9) 谷哲弥 1993 小学校低学年の評価を考える 理科教室'459,
- 10) 梅原利夫 1992 教育課程から見た生活科 白井嘉一・三石初雄(編) 生活科を創りかえる 国土社 pp.116-118
- 11) 三石初雄 1995 低学年教育と自然認識 理科教室'477, pp.23

